

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2023.2. VOL.49

contents

極 社会貢献
Social contribution

人 時の人
People in the news

技 研究
Current topics in research

和 お知らせ
Information

救急・災害医療センター（仮称）の建設工事を行っています。

名古屋市立大学では、2025年度に「救急・災害医療センター（仮称）」の開棟を予定しています。当施設は、高齢化の進展に伴う救急搬送件数の増加へ対応すること、南海トラフ巨大地震等の発生時に津波の影響を受けない最前線の災害拠点病院として医療機能を継続すること、さらには救急科専門医の育成・輩出することを目的としています。

建物は、地下1階地上8階建て、鉄骨造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造）、免震構造となっており、地下では地下鉄桜山駅及び既設棟と接続、地上では5階まで既設棟と接続し、屋上にはヘリコプターの緊急離着陸場を設置する計画となっています。また、屋外部分を除く延床面積が約27,600㎡を誇り、救急災害医療施設として日本最大級となる予定です。

工事の着工に先立ち、2022年9月下旬には、工事の安全と順調な進捗を祈願して、起工式・安全祈願式典を行いました。式典には、本学関係者、設計監理者、施工者から総勢50名程度が参加しました。

当日は大安であることに加え、一粒万倍日という吉日であり、天候にも恵まれ、式典は厳かな雰囲気のもと進められました。

式典の最後に郡理事長より、「数々の特徴を兼ね備え、全国に類を見ない先端的な施設であり、市民から愛され信頼される施設を築いていく」との決意が述べられました。

2022年10月より着工し、現在（2023年1月時点）は、建設場所の地中にある既存躯体の解体工事や建物を支える杭の打設工事を行っています。

工事期間中は、工事に伴う騒音・振動が発生することについて、ご迷惑をおかけすることもございますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願い致します。

文責：名古屋市立大学病院管理課



“瑞医の由来”

『瑞医（ずい）』という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port（港・空港）」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

東部医療センターが整形外科用ロボット支援手術システム「CORI」を導入しました

東部医療センターでは、より安全かつ正確な人工膝関節置換の実現のため、スミス・アンド・ネフュー社の整形外科用ロボット支援手術システム「CORI」(2021年発売)を愛知県内で初めて導入いたしました。

人工膝関節置換術とは変形性膝関節症、膝の骨壊死、関節リウマチなどにより軟骨や骨がすり減り痛みが出た際に、その箇所を削り切って人工関節を入れることで、痛みなく歩けるようになるための手術です。CORIは人工膝関節置換術において、赤外線を発するカメラや赤外線を反射するマーカーを使用し、患者様の骨やひざの位置、動きを正確に認識し、医師が決めた範囲の骨のみを切除するようコンピューターが制御を行う手術支援ロボットです。患者様一人一人の膝の状態を手術中にシステムに読み込ませることで、オーダーメイドな手術をサポートし、患者様の膝の状態に応じた人工膝関節システムを提供することが可能となります。

CORIの導入により、手術による患者様の負担を軽減し、患者様の早期の回復、早期社会復帰を目指し、これまで以上に良い治療を提供して参ります。
文責：東部医療センター 経営課

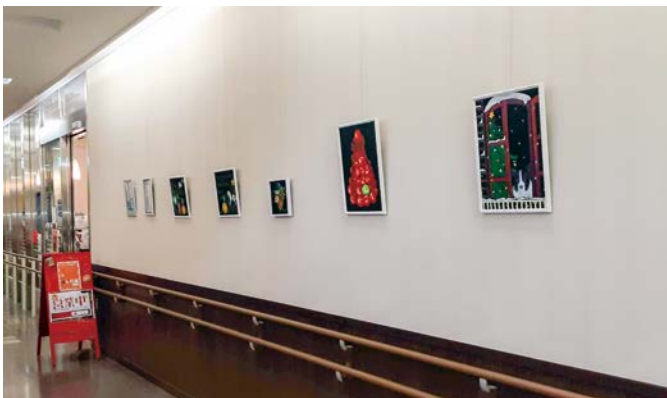


ヘルスケアアート展示を行いました

例年であればクリスマス会や年越し会、スポーツ選手の慰問等の、患者さんのこころを和ませる企画が盛りだくさんとなる季節です。しかし、残念ながらコロナ禍のためにいまだ院内において沢山の人が集う形でのイベントは困難な状況です。そこでこの度、日頃よりヘルスケアアートのボランティア活動に取り組むチョークアート教室「アーティスティック チョーク」代表の稲垣ともみ様(写真右の右)と所属作家の吉峯宏美様(写真右の左)にご協力を頂き、2階外来の喫茶店側の壁面に「冬」をテーマとしたチョークアートの展示を行いました。

チョークアートとは、オーストラリア発祥の比較的新しい芸術です。木材(黒板など)にオイルパステルで色をのせ、筆などの道具を使わず指で色を伸ばして描画します。鮮やかな色彩と温もりのある質感が大きな魅力で、人の眼を引き付けます。今回、壁一面に「クリスマス」や「おせち料理」など、冬の風景や味覚を思い起こす作品がたくさん飾られ、受診や検査に向かう病院内外の患者さんや付き添いの方に目を留めていただきました。

「つらいしんどい」ことの多い病院だからこそ、ほんの少しでも明るい気持ちになっていただけるような環境づくりが大切です。今後も訪れる皆さんのこころをほっと癒す取り組みを企画していきます。
文責：西部医療センター 経営課



01 社会貢献 Social contribution

「きた・きた健康福祉フェスタ」を開催しました!

3年間、待ちに待った北区区民まつり。当院も「きた・きた健康福祉フェスタ」を企画し共同開催しました。例年、病院内を会場としていましたが、コロナ対策のため隣接する公園「ウェルネスガーデン」の屋根つき広場で各職種がブースを出展。当日は好天に恵まれ、親子連れやご高齢者の方など、何とのべ768人の方にご来場いただきました。

救急車カンガルー号との撮影コーナーや各種体験コーナーやシリンジポンプの水鉄砲などが大好評! 西部医療センターを身近に感じていただけるいい機会となりました。また、多職種が一丸となってイベント開催したことで、お互いの業務に触れることができたことも、良い機会となったと思います。

文責：西部医療センター 経営課



祝 最高裁判所長官表彰 西部医療センター 医療安全管理室の伊藤清彦さん

この度、当院の医療安全管理室の伊藤清彦さんが、長年にわたり民事調停委員を務められたことに対し、最高裁判所長官より記念品(金杯)の授与及び表彰を受けました。この度は誠にありがとうございます。

● 伊藤さんから一言お寄せいただいております

医療安全管理室の伊藤清彦が最高裁判所長官表彰を拝受しました。

日頃は、医療安全管理室において、医療事故などの事務を行っておりますが、週に1回程度、調停委員として簡易裁判所に出かけて調停を行ってきました。調停とは、交通事故、近隣関係、医療事故など広い分野のトラブルの解消を図るものです。平成18年に就任し、早いもので16年が経ちました。これも職場の皆様の理解があってのものと感じています。

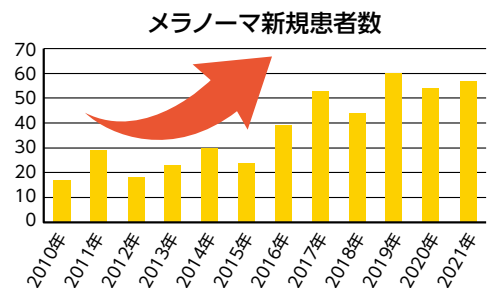
これからも、調停委員として培った知識を職務に反映していけるように頑張りたいと思っています。 文責：西部医療センター 経営課



メラノーマセンター開設

メラノーマ(悪性黒色腫)は悪性度が高く、生命予後に関わる疾患です。見た目がほくろと区別がつかないものも多く、進行してから受診される患者さんも多くおられます。2014年、ニボルマブが他のがん種に先んじて保険適用となり、さらに分子標的治療薬などの新たな治療選択肢も登場し、手術療法や陽子線治療などを組み合わせて治療することで劇的な予後の改善がみられています。治療は複雑化し、専門施設と非専門施設の差が顕著になっています。名市大は全国的に見ても非常に多くの患者さんが受診しています。より一層専門性を高めて患者さんに還元することを最大の目的にメラノーマセンターを開設いたしました。本センターでは皮膚科・腫瘍内科・放射線科・病理診断科・形成外科など複数の診療科が連携します。迅速で正確な診断や、より最先端で適切な治療を患者さんに提供させていただきます。いよいよ、2023年10月から本格稼働の予定です。

文責：加齢・環境皮膚科学 教授 森田 明理



高橋医学研究科長再任決定

2023年4月より医学研究科長・医学部長二期目を拝命いたしました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

4月からみどり市民病院、みらい光生病院が大学病院化されることで約2,200床を擁する医学部附属5病院群が形成されますが、そのスケールメリットを最大限に生かすように診療、研究、教育面で支援・充実させてまいります。二期目では医学研究科のブランド力を高めるために研究力強化と人材育成に取り組みたいと考えており、大学院定員を増員して研究力の底上げを図ると同時に、10年、20年先の将来を見据えたコメディカル育成のための新学科設置ならびに学部統合についての検討も進めていきます。

何卒ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



新任教授紹介

呼吸器・小児外科学 奥田 勝裕 教授

2022年9月1日付で病態外科学講座呼吸器・小児外科学分野教授を拝命いたしました奥田勝裕です。謹んでご挨拶申し上げます。

私は2000年に名古屋市立大学医学部を卒業し、当時の第二外科教室に入局しました。名古屋市立大学病院・関連病院で外科研修を受けたのち、愛知県がんセンターにて胸部外科レジデントとして呼吸器外科の修練を受け、その後約2年間米国Harvard Medical School, Dana Farber Cancer Instituteにて肺がんの発がん原因遺伝子・分子標的治療薬の基礎研究に従事してきました。2011年に名古屋市立大学帰局後は、呼吸器外科手術・薬物療法を中心に臨床・教育・研究に従事してきました。

近年の呼吸器外科領域の発展は目覚ましく、手術においては胸腔鏡下手術・ロボット支援手術といった低侵襲手術が普及し、肺機能を極力温存した縮小手術(区域切除・部分切除)が個々の病態に合わせて選択されるようになってきています。また、特に肺がんに対する薬物療法の進展は目を見張るものがあり、新たな術前・術後薬物療法、Precision Medicineの発展により、肺がんの予後には大幅な改善が見られてきています。

今後も引き続き最先端の最適な治療が届けられるよう、臨床・研究・教育に力を注いでいきたいと思っています。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



奥田 勝裕 教授

「時の人」

医学研究棟1Fエレベーターホールの綺麗な生け花

小学生の時にクラブ活動で、フラワーアレンジメントをやったことをきっかけに生け花に興味を持ちました。中学生の時はやる機会がありませんでしたが、大学生になり友人が生け花をやっていることを知り、自分もやってみようと思い、生け花を始めました。生け花には色々な流派がありますが、私は池坊をやっています。池坊は生け花の根源であり、長い歴史があります。池坊を始めて2年ほどしか経っておらず、まだまだ技術不足ですが、多くの人目につく場所に飾らせていただいているので、もっと上達していけるように頑張りたいと思います。お花を飾っていると時々声をかけていただくこともあり嬉しく思います。お花を見て皆さんが少しでも和やかに感じていただければ幸いです。

文責：新M4 鈴木 杏実さん

殺風景だったエレベーターホールが生け花のお陰で癒しの空間になりました。

ふと目に入った生け花が疲れをリセットし次に向かう力を与えてくれます。

お花の名前が気になっています。



JST共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)に本学のプロジェクト「近未来こども環境デザイン拠点」が採択されました

先進国の中でも、我が国の少子化の進行は急速で、近い将来、行政による社会サービスが維持できなくなるといわれています。繰り出される少子化対策は期待された効果を上げず、近年の政策研究は、少子化が進むことを前提に、長寿健康の達成によって社会の破綻を防ぐ提案が主体となっています。

こどもを授かることは親にとって喜びであるとともに、こどもの健康や教育の不安、支出の増加、キャリア形成における不利益、ワークライフバランスの難しさや心身の消耗など、多岐にわたる苦勞をもたらします。かつて大家族や親戚、隣人などのコミュニティに分散されていた育児タスクは、核家族化が進んだ現在、親だけ・母親だけが孤立して担当する“孤育て”に変貌してしまいました。コロナ禍はこの傾向を加速し、人の誕生・成長・老い・死といったライフサイクルも、当事者だけで対峙すべきイベントに変えられてしまいました。

多くの人々が孤立した環境で生まれ、一人で生き、一人で死んでゆく、そんな未来を変えるために計画された本プロジェクトは、今年度、科学技術振興機構(JST)の「共創の場形成支援プログラム」(地域共創分野:育成型)に採択されました。名古屋市は名古屋市、中部産業経済界と強力なタッグを組み、妊娠・出産・育児に対する明るいイメージを持てるように人と社会を変え、多様な個性と選択が尊重され、支え支えられる近未来の実現を目指します。社会医学と周産期医学が核となり、心理教育学とデータサイエンスのエキスパートを迎えたチームが、“すこやかピアサポートが埋め込まれた社会”に向けて、デザインと社会実装試験を繰り返します。市民の大学として、先端科学によるセンシング技術とIoTを駆使しながら、1.こどもがほしいと思った瞬間を支援する“すこやかワークライフ環境”、2.子育ての行き詰まりを軽減する産後母児入所や託児をいつでも提供する“すこやか親子サポート”、3.‘こどもがほしい’から‘巣立ち’までの親子の心と体の健康を守る“すこやかモニタリング”、4.多様な個性のよりどころを提供し、支え合う家族のイメージを醸成する“すこやか成育環境”を実現します。

これまで、地方の農山村や小都市における子育て支援事業により、定住者の増加を中心とする成果が得られた事例は散見されますが、大学を核とした、大都市圏における少子化対策プロジェクトの前例はありません。子育て支援を市政の柱に据える名古屋市を舞台に、地方からの人口流入に頼らない少子化対策が成功すれば、地方再生にも貢献するはずで、子を持つ人も持たない人も明るい未来を感じられる近未来都市ナゴヤを作るために、私たちは来年度までの本プロジェクト期間内に、今後10年にわたる本格型プログラムへの移行を目指した活動を展開していきます。どうかご注目下さい。

文責:環境労働衛生学 教授 上島 通浩 / 新生児・小児医学 准教授 岩田 欧介



■山中 亮(人間文化研究科)

■横山 清子(芸術工学研究科)

以上の医学研究科の3名、他研究科の教員2名、計5名の研究課題リーダーが本プロジェクトを牽引します。

血液・腫瘍内科のCAR-T療法

当院では中部地区では数少ないCAR-T細胞治療の提供可能施設として、造血器腫瘍における様々なCAR-T細胞療法に取り組んでいます。

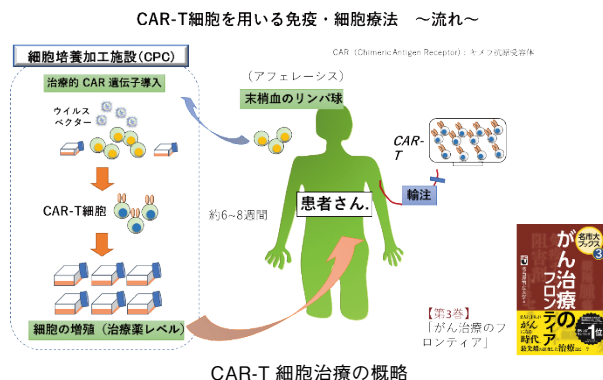
CAR-T細胞治療が含まれる免疫・細胞療法は、化学療法、外科療法、放射線療法に続くがん治療の第4の柱として位置づけられています。CAR-T細胞治療は、患者さんからリンパ球(T細胞)を採取した後に、細胞調整施設でキメラ抗原受容体(Chimeric Antigen Receptor: CAR)という人工的な分子を導入することでがん細胞を直接攻撃するようにT細胞を遺伝子改変し、数を増やします。増えたT細胞を患者さんに戻してがんを攻撃する新たな免疫・細胞療法です。

CAR-T細胞による治療には、①患者さんから細胞採取 ②院内で調整・凍結した細胞原料の細胞調整施設へ搬送 ③製造された製品の受領と管理 ④製品投与後の合併症の管理の一連の過程で、高い品質管理と安全性確保が必要となります。そのため監査を受け、提供可能と認定された施設のみで本治療が可能です。

現在、白血病・悪性リンパ腫のCAR-T細胞治療として、キムリア(tisa-cel)およびブレヤンジ(liso-cel)の2製品、多発性骨髄腫のCAR-T細胞療法としてアベクマ(ide-cel)およびカービクティ(cilta-cel)の2製品が施行可能です。CAR-T細胞治療をご希望の患者さんをご紹介いただく際は、治療対象の要件をご確認のうえ、当院の地域医療連携センターよりご予約をお取りいただきますようお願いいたします。



院内での細胞調整



CAR-T細胞治療の概略

文責：血液・腫瘍内科学 教授 飯田 真介／血液・腫瘍内科学/輸血・細胞療法部 准教授 李 政樹

第63回川澄祭

2022年10月29日(土)、30日(日)に第63回川澄祭が開催されました。コロナ禍で規模を縮小した形でしたが、3年ぶりに開催することができました。例年とは異なり、ステージを設営しない、来場者の人数制限を設ける、キャンパス内での飲食を食堂内に限定するなどの感染対策を取りながらの実施となりましたが、多くの方に足を運んでいただくこととなりました。

開催に至るまでの道のりは平易なものではなく、2年間開催が中止されていたこともあり、学生の間でもわからないことが多くあったと思います。また、一時は開催自体中止にするか、判断を迫られた場面もありました。それでも、熱心に取り組み、何度も教職員と打ち合わせを重ねて川澄祭を実現させた学生の実行力には感心するばかりです。

当日は天候に恵まれ、2日間共に特に大きなトラブルもなく終えることができました。子供から高齢の方まで地域の方にも多数お越しいただき、それぞれが楽しんで参加いただけたことと思います。川澄祭が地域交流の場となっていると感じる瞬間であり、今後も続いていくと良いと感じます。

川澄祭が学生の思い出に残ることはもちろんですが、将来医療従事者として働いていく中で、地域住民の方々との交流や他者と協力して物事をすすめていく姿勢や経験が糧になれば幸いに感じます。

文責：医療人育成課



模擬病院の様子



川澄祭実行委員会のメンバー

令和4年度 水谷孝文賞受賞者紹介

名古屋市立大学病院初期臨床研修プログラムでは、故水谷孝文先生(名古屋市立大学医学部同窓会初代会長)・水谷浩明先生(八事病院理事長)の御厚意により、研修医育成基金をいただきながら、当院の初期臨床研修を充実したものにすべく努力しています。その基金は研修医の学会参加や発表研究の論文などに必要な資材や機材の購入などに利用させていただいています。その中で、当院での研修に熱心に取り組んでいる研修医に対して、水谷孝文賞を授与しています。令和4年度も研修医の自己評価、研修医同士の相互評価、ローテート科の指導医による評価、各部門のメディカルスタッフからの情報、インシデントレポートの適切な報告、当院の魅力を伝える説明会でのプレゼンテーション、学会発表や論文作成など25項目の評価基準から、水谷孝文賞受賞者として4名の研修医が選出されました。

4名の受賞者は11月21日に開催された初期研修フォーラム2022に出席し、1年次の名市大病院や協力型病院での初めての救急当直での経験から仲間との勉強会、大規模会場でのコロナワクチン接種業務、Webで参加した学会での症例報告など、それぞれの研修生活の様子を示すプレゼンをしました。この様子はZOOMで参加した全国の医学生に発信され、当プログラムにおける研修医の成長・可能性を示す貴重な機会となりました。参加者からは、「研修でどのような研究や活動を行なっているのかがわかりとても参考になった」「研修医が生き生きとした雰囲気で研修に取り組まれている様子が伝わり、同じ環境で研修したいと思えた」と好評でした。

受賞された4名の先生には、今後さらに研鑽を積み、患者さんに慈しみの心をもった医師になれるよう努力するとともに、基金の主旨にあるように名古屋市立大学の一員として将来の医学の発展のために研究にも勤まれることを期待します。

文責:総合研修センター センター長 林 祐太郎



左から、大喜多副センター長、高橋副センター長、受賞者の金森勇樹先生・大竹杏佳先生・徳田華先生・服部滉平先生、林センター長、兼松副センター長
(スライド映写：故水谷孝文先生)

名市大病院、初期臨床研修で完全フルマッチ達成!

本年度の初期臨床研修医マッチングにて、当院定員37名中の37名の完全フルマッチ(100%で全国同率1位)を達成しました。マッチング制度ができて20年近く経過しましたが、全国の大学病院にとっては、自学医学部生の流出という点で大きな逆風になってきました。そのような厳しい現実の中で、完全フルマッチとの公表を受け、一步一步当院の研修内容と制度の改善に努めてきた研修センターのメンバーは、長年の苦勞が実を結んだと皆で喜びを分かち合いました。

当院の初期臨床研修はPG1名市大病院2年基盤コース、PG2連携たすきがけコース、PG3小児科重点コース、PG4産婦人科重点コースの4つから成り立っており、約8割を占めるPG2研修医は1年次を協力型病院で研修します。特に東部・西部医療センターとの連携研修は魅力的なものになっており、それが今回の快挙につながったと考えています。

その間、各研修医の志望の実現に最もふさわしい診療科の臨床研修委員の先生にメンターとなっていていただき、きめ細かい指導を行ってきたことが、全国の医学生に信頼と安心を感じてもらえて今回の結果につながったと感じています。

ただ座して待つのでは当院の魅力は伝わらないと考え、研修センターメンバーは各地での説明会に休日返上で出張しアピールしております。さらにWebで全国の医学生との交流会も毎月のように開催しています。ありがたいことに、間瀬光人病院長が毎回出席され、当院の全職員が研修医を温かく優しく歓迎すると語って下さったおかげで、十数年ぶりの完全フルマッチを成就できたと思います。

名市大のより一層の発展に貢献できるよう、総合研修センター一同は邁進して参りますので、初期研修医の指導とともに、総合研修センターの活動へのご支援を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

文責:総合研修センター センター長 林 祐太郎



白衣授与式

2023年1月4日(水)、さくら講堂にて、2022年度白衣授与式およびStudent Doctor認定証授与式が行われました。

当日は、医学部同窓会「瑞友会」の松本隆会長、高橋医学部長、青木副医学部長、飛田副医学部長、高桑修共用試験統括責任者が出席し、まもなく臨床実習を開始する医学部新5年生98名に白衣とStudent Doctor認定証を授与しました。

学生たちは瑞友会から寄贈された瑞友会のロゴと学生の氏名が刺繍された伝統の白衣を受け取り、感慨深げな面持ちでした。決意表明した学年代表の桐原聖子さんは、白衣を寄贈いただいた瑞友会への感謝と、これから臨む臨床実習にあたっての決意を述べていました。

今回、白衣とStudent Doctor認定証を授与された学生たちは、4年生時に共用試験臨床実習前OSCEおよびCBTに合格し、臨床実習に臨むに際しての十分な知識、技能、態度を身につけているStudent Doctorとして認定されたため、附属病院等における臨床実習をスタートさせました。今後は実際の医療現場において知識、技能、態度を磨いていくことになります。教職員もより良い学びの場を提供できるよう努力していきたいと思ひます。

文責：医療人育成課



医学部解剖感謝式

2022年度の解剖感謝式が10月18日(火)の午後にしめやかに執り行われました。式には、献体者ご遺族の他、篤志献体団体「不老会」役員と会員の皆様、肉眼解剖学実習を履修した医学部2年生と実習を見学した看護学部2年生、ご献体による手術手技研修に参加した臨床医、並びに、医学部、医学部附属病院の教職員、大学役員が参列し、ご成願された169柱の御霊のご冥福が祈念されました。式では、医学部2年生の高良志織さんによる学生式辞に続き、ご成願者のご芳名が奉読され、終わりに高橋智医学部長が御礼の言葉を述べました。名市大の学生、教職員、医療従事者は、ご献体者の崇高なご遺志を汲み、今後も医学の発展に向け精進して参ります。

文責：統合解剖学 教授 植木 孝俊



Post-CC OSCE開催

2022年10月8日(土)、M6の81名に対して共用試験Post-CC OSCE(Post-Clinical Clerkship Objective Structured Clinical Examination、ポスト・シーシー・オスキー)を実施いたしました。

2020年度からは正式実施となり、本年度が3年目になります。医師国家試験では、医師に必要な「知識」を中心に評価がなされますが、卒業時の「技能・態度」をみる全国共通の試験はありませんでした。このため、導入されたのがPost-CC OSCEです。本学では、Post-CC OSCEの合格が卒業要件の1つになっています。

共用試験は、医療系大学間共用試験実施評価機構が行う、医学生の実力と適性について全国的に一定水準を確保するための全国共通の標準試験です。共用試験としては、臨床実習を開始する前に、CBT(Computer Based Testing)とOSCE(Objective Structured Clinical Examination)が行われてきました。この4年生の共用試験は、2023年より公的化されます。Post-CC OSCEについても、今後は公的化されることが考えられています。

Post-CC OSCEの試験内容は、下記ようになります。ある症候を有する模擬患者さんに医療面接を行います。医療面接により診断仮説を立て、その診断仮説に基づいた身体診察を行います。次に、病態と鑑別疾患、及びその根拠について考えます(臨床推論)。これらの内容を整理して指導医に報告をします(プレゼンテーション)。この一連の技能と態度が、学外も含めた評価者により採点されます。

本年度は、機構から指定された3課題、本学独自に作成した3課題の6課題の試験となりました。全国的にも縮小した規模での実施となる中、機構から派遣された監督者のもと、本学の教職員のみならず、他大学や臨床研修病院からの評価者と一緒に、6課題の試験を無事に実施することができました。一般社団法人日本SP協会からは模擬患者さんのご協力をいただきました。

医学部の卒業時には研修医として患者診察を任せることができるレベルを担保することが求められています。このためには、名古屋市立大学病院群で有機的に連携し、臨床実習の改善を継続していく必要があります。今後とも本学の医学教育改善へのご協力をお願い申し上げます。

文責：Post-CC OSCE実施責任者 高桑 修、委員 植木 典浩

共用試験 Post-CC OSCE の位置付け

